
僕の持ち主は女王様

じょっぴんかる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の持ち主は女王様

【Nコード】

N0843Y

【作者名】

じょっぴんかる

【あらすじ】

妖魔と人間が争う和の世界。その世界では生きた刀を作ることができる伝説の刀鍛冶の力によって平和を保っていた。だがその世界から妖魔が溢れ出し別の世界が危機を迎える。その別世界の妖魔を討伐するため、生きた刀の風太は元いた世界から送られることになる。その世界は現代の日本であり、出会った彼の使い手となる人物はとてつもないお金持ちのお嬢様だった?!

黒の女王

「うわあああああん！　まだ追いかけてくるよう！」

少年の泣き叫ぶような声が木霊し閑静な住宅街に響き渡る。少年は街灯の灯った道の中、薄い水色の着物の袖を揺らし、物凄い勢いで走っていた。前が見えぬほどに行き先もわからず、ただガムシヤラにまるで何かから逃げまどうように。いや実際に逃げまどっているのだ。

彼の名前は風太。彼は異世界からこの世界へと来た者だ。黒い短い髪に145cmぐらいの小学五、六年生並みの身長。それに男の子か女の子か区別のつきにくい幼い顔をしている。

「グオオオオオオ！」

確認のため風太が振り返ると、後ろには巨大な鬼のような角の生えた生き物。堀の倍以上はある赤い巨体を揺らし、雄たけびを上げ地響きを起こしながら彼の事を追いかけて来ていた。

「ううう！　弥一さんのバカ！　持ち主の近くに送るって言ったのに！」

泣きそうな声で恨み言を並べても状況は変わらず、風太は前へと向きなおり無我夢中で走り続ける。

「はあはあ……」

だがもはや風太の息は切れ切れであり、彼の走る足は少しばかりフラついていた。腕元や足元にひっかかる着物と草履といった動きにくい格好も彼の体力を奪っていく。風太の視界は霞み、意識が少しずつ遠のく。そのままとうとう歩き疲れ、前かがみになり崩れ落ちそうになる。

——その時、不意に前から歩いてきた人物とぶつかり、倒れかけた彼を柔らかな感触が受け止めた。

「ご、ごめんなさい！」

風太の薄れていた意識がしだいにクリアになっていき、慌ててぶつかった人物の胸元から頭を離す。

姿勢を正し緊迫した状況ながらも、姿も確認せずにすかさず頭を下げあやまる。

「いや、気にせずともよい。それにしても子供がこんな時間に一人にいるとは珍しいな」

透き通った美しい声が風太の頭上で聞こえる。彼が頭を上げ見上げた視線の先には、街灯に照らされ腰元まで届く黒い長い髪をかきあげる女性。

年齢は十代後半から二十代前半といったところだろうか。妖艶な笑みを浮かべる全ての人を魅了しそうなほどの綺麗な整った顔立ち。この夜の住宅街に溶け込みそうなほどの真っ黒な高級そうな衣服。その衣服の上からもわかるほどの胸の膨らみと綺麗な腰のくびれ。スカートの下には白く透き通った肌のふとももが輝いていた。

まだ小学生ぐらいに見える幼い彼も例外なく、その誰もが目をやっってしまうような女性に顔をあげたまま口を少し開き魅入ってしまう。

「それと後ろのデカ物は一体なんだ？」

一切の動揺がない口調で彼女はそう言う。その言葉で身に迫っていた危機を思い出し、風太は先ほど走ってきたほうへと振り返る。

そこには依然、鬼が立ち尽くしていた。いなくなってくれていればどれだけよかったものか。風太はそう思いながら、唇をかみ締め冷や汗を浮かべ、腰に挿していた護身用にと渡されていた日本刀の刃を鞘から右手で抜き取る。

刀を両手で構え彼女の一步前に飛び出す。ここで自身が逃げれば彼女が殺されてしまうかもしれない。ただその一心だった。

「お、お姉さんは下がってて！　ぼ、ぼくが何とかするから！」

「大丈夫なのか？　少年。明らかに震えているが」

「い、言われなくてもわかってるよ！」

凶星をつかれ思わず、風太は荒々しい口調で答えてしまう。彼女の言うとおり彼の手足は震え、その体格の小ささ故に刀を両手で持ち上げ、胸元で構えているのすら大変そうであった。

何故この人はこんなにも冷静なのだろうか？　何故逃げないんだろうか？　そんな考えが風太の脳裏に少しよぎる。だがすぐに恐怖に支配され、前に立ち尽くす鬼を見上げ睨みつける。

「さ、さあ来い！　ぼ、ぼくが相手だ！」

「グオオオオオオオツツ！」

辺りに響き渡るほどの唸り声を上げる鬼。風太の言葉を皮切りに

するかのように、鬼は豪腕を高く振り上げ、風が巻き起こるほどの勢いで拳を振り下ろす。

2 m以上ある高さから振り下ろされた鬼の拳は彼の手前へと突き刺さり、コンクリートで塗装された地面を軽々と粉碎し辺りにコンクリートの破片が飛び散る。

少し後ずさりしているのが幸運だったのだろう。風太の顔前をかすめて当たらなかったものの、気圧されてしまい尻餅を着き、刀が彼の手からこぼれ落ち地面の上に転がっていく。

戦意を無くし風太は恐怖におののき動けなくなる。彼の中に次第に焦りがつのっていく。次はない、鬼の拳は彼を確実に捉えるだろう。

「うう、や、やっぱりぼくだけじゃむりだよ……持ち主がいないと、どうしよう……」

「――持ち主?……」

その言葉が風太の脳裏に引っかかる。彼をこんな状況にした人物は持ち主の近くに送ると言ったのだ。

風太はその人物の言葉を信じ、ある可能性に賭ける事にする。慌てて勢いよく立ち上がり、鬼へと背中を向け、後ろへと振り返る。

「あ、あのお姉さん!」

「ん? 何だ?」

「えっ、えーっと、ぼくを持って戦って! じゃなくて、んーっと、ぼく、ぼくの使い手になって!」

「どういうことだ？」

「あーもうぼくはお姉さんの持ち物なんだってば！」

上品な佇まいで冷静に受け答えをする女性。それに反し風太は焦るあまり口から思ったような言葉が出ない。

「もうこうなったら……」

風太は少しでもわかりやすく説明するため、自身の姿を少年の状態から刀へと変貌させる。真っ黒な鞘に包まれた刀が空中へと浮く。

「ほう。少年が刀になるとはな」

「お姉さん、お願い！ ぼ、ぼくの力を使ってあいつを倒して！」

風太は彼女へと強く頼み込む。だがこの一言ではい、そうですかと答える人はまずいなさそうである。死ぬかもしれないのだ。

だがどの道このままでは死あるのみだ。風太は言葉を発することができ、意識はあるものの、彼からは鬼の姿しか見えず、彼女が何を考えどんな表情をしているかは感じ取れない。それでも風太は彼女を信じた。ただ黙り込んで待つ。

——不意に風太を暖かな温もりが包み込む。真っ黒な鞘が抜き取られ白い刃が剥き出しになり、月夜に照らされ妖しく光る。

「綺麗な刃だな。それで私はどうしたらいい？」

「あつ、うん！ その、あ、あの鬼を倒してもらいたいんだけど……」

…む、無理だったら逃げてもらっても……」

彼女が刀を握ってくれたことは嬉しかったものの、弱気になり風太は尻込みをしてしまう。

「わかった、私に任せておけ——」

弱気な風太とは正反対に彼女は臆した様子もなく一言そうつぶやく。

「あ、そうだ！　ぼくたち刀の強さは心で決まるって言っていたから——」

風太がそう言いかけている刹那——彼の目の前にいた鬼の上半身に切れ目が入り崩れ落ちる。

一瞬の出来事。彼は何が起きたかわからず、心の中で目をパチクリさせ、呆然とする。

あれだけ強そうであった鬼はそのまま塵となり悲鳴を上げる間すらなく、風に流され消え去っていく。

「——ん？　何か言ったか？　少年」

「い、今のお姉さんがやったの？」

「いや、私は刀を軽く振ってみただけなのだが、もしかしたらそうなのかもしれないな」

風太は刀の状態から人の姿となって彼女の前に立ち、顔を上げ驚いた様子で彼女を見つめる。

「お姉さん、すごいんだね……」

「ふふっ、まあ、私は何たって神宮寺家の主、神宮寺玲羅じんぐうじれいらだからな
玲羅と名乗った彼女が髪をかきあげ、誇り高げにそう言い放つ。

「そういえば、先ほど少年は私の物と言っていなかったか？」

「あっ、うん！　ぼくを使えた人だからきつとぼくの持ち主だと思
う……」

「そうか、名前は？」

「風太！」

「風太か。可愛い名前だな」

それだけを聞くと玲羅は満足げな笑みを見せる。妖しげな瞳で風太の事を見下ろし腰をかがめ頭を撫でる。

「さて、それでは帰るとしようか。私の家にな」

「ぼ、ぼくも着いていっていいのかな？……」

「もちろんだ、私の物なんだろう？」

「あっ、うんっ！」

背を向け、歩き始めて行く彼女の後を、風太も着物の袖を揺らし、

駆け足で追いかけて行く。

風太の顔には満面の笑みが溢れており、無邪気な瞳が輝いている。彼がもし犬であれば尻尾をバタつかせている状態であろう。

これから彼の身に起こる様々な出来事も知らずに――――。

たどり着いた先は

——それから、十分ぐらいたった頃。風太と玲羅は音一つない真つ暗闇の閑静な住宅街を歩きぬけ、辺りは段々とさらに静かになっていく。

最後の住宅の角を通り過ぎ、開けた場所へと出る。そこにはまるで別世界へときてしまったかのような、大きな西洋屋敷がポツリと一軒建っていた。

「ここが、私の家だ」

屋敷へと続く一本道を歩き、風太と玲羅は屋敷の前へと立ち尽す。

「へえ〜！　すごい大きいね！」

「そうだろ？　ここら辺では一番の大きさだろうな」

立ち尽くす風太の前には、鉄柵で囲われ、薄暗く見えにくいものの広大な緑が広がる屋敷。屋敷は普通の家の二倍以上の横幅を誇り、三階建て以上はある大きさであった。

木造立ての藁ぶき屋根の家しか見たことがない風太にとっては物珍しく、目を輝かせ彼は感慨深そうに屋敷を眺め見る。

「さて、それでは入るとするか」

「あっ！　うんっ！」

鉄柵できた入り口の門を開け、中へと入り歩き進んでいく玲羅。その後ろ姿を期待と緊張に胸を弾ませながら風太も追いかけていく。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

屋敷までの長い道のりが続く中庭を抜け、屋敷の中へと繋がる玄関の扉を風太の前に立つ玲羅がゆつくりと開け室内に入る。

風太は彼女の背中の中の横から顔をのぞかせ部屋の中を見る。視界に飛び込んできたのは螺旋階段があり、玄関とは思えぬ広さがる円形の部屋。

部屋には赤い絨毯が敷き詰められ、正面には長い食卓のあるホールが垣間見えていた。

白と黒のメイド服を着た沢山の女性達が二人を囲むように深く頭を下げ出迎える。

「お嬢様、遅かったですな」

「ああ、ちよつとな」

頭を下げるメイド達の間を抜け、初老の男性が風太達の前へと姿を現し胸の前に手をやり頭を下げる。男性は白髪に眼鏡をかけ真っ黒な執事服を着ており、紳士的な態度から優しい雰囲気を感じられた。

「そちらの少年は？」

「私の物だ」

「はあ……」

きっぱりと言いつ切る玲羅の答えに少し困り果てた顔をする執事の男。

「風太と言う名前らしい。爺、この子を湯へと連れてやっていってくれ。それとこの子の着付けも頼む」

「メイド服でな――」

「――畏まりました」

そう言い残し、玲羅が背筋が冷たくなるような笑みを見せ、螺旋階段を上り彼女はどこかへと消えていく。

残された風太はメイド服と言う言葉の意味を知らずに、彼女の背中を心細そうな目で見送る。

「では、風太様こちらに」

「あっ、はい！」

執事の男が玄関の部屋から右側の扉のほうへと風太を案内する。扉の向こうにはどこまで続いているかもわからない廊下があり、先頭を数人のメイド達が歩き、その後ろを、風太と執事の男が行く。

「あの……」

「何でございましょうか？」

「ぼくについて何も聞かないの？……」

何も聞かずに黙々と歩き続ける執事の男に、不思議そうな顔をして風太が背中を見上げたずねる。

「お嬢様の無茶には慣れていますから」

執事の男が歩きながら落ち着いた口調で一言。

「それにお嬢様といえど、いくら何でも人攫いはしないでしょ」

「ああ見えて結構お嬢様は面倒見がいいところがありますので、きつと風太様には何か事情があるのでしょ？」

執事の男がさらに一言そうつぶやく。その一言だけで彼の玲羅に對するかなりの信頼が伺えた。

——それから数分歩いた頃だろうか。一つの突き当たりの扉の前へと到着する。

「こちらでございます。中の部屋にあるカゴにタオルなどが置かれていますのでそれをお使ください」

「うんっ、ありがとう！」

頭を下げ去っていく執事の男とメイド達。その後ろ姿に風太もペコリと頭を下げ一人となる。

胸元くらいの高さの取っ手を掴み、風太は脱衣所へと入る。一部屋ぐらいあるほど広い脱衣所。壁際には衣服を入れるための棚が並べられている。

その棚にカゴが一つあり中には真っ白なタオルが置かれていた。カゴの前へと立ち風太は着慣れた着物を脱いでいく。腰へとタオルを巻き、草履の上に折りたたんだ着物を乗せカゴへと入れる。

「わあ、すごいなあ」

ガラス張りの引き戸を開くと湯気があふれ出て風太の顔を遮る。浴場には大理石の地面が敷き詰められており、大浴場と言えるほどの大きさであった。

浴場の中心にある大理石でできた浴槽には獅子の口からお湯が流れており、奥には取り付けられたシャワーが並べられている。

とりあえず風太は先に体を洗うことにし、シャワーの方へと向かう。

「失礼します――」

閉め切っていたはずの引き戸が開く音が聞こえ、落ち着いた女性の声がする。風太が慌てて前を隠しながら驚いた様子で振り返るとそこには先ほどと同じメイド服姿の女性が頭を下げ、立っていた。

見た目は玲羅にも引けを取らぬほどの美しさであり、メイドながらも玲羅と同じぐらいの年齢に見える顔立ち。

茶色い短い髪をしており、身長160cmぐらいだろうか？ 物静かな落ち着いた雰囲気を出しながら浴場へと入ってくる。

「風太様の体を洗いに来ました。私、この屋敷でメイドをしておりますかんざきゆかり神崎縁と申します、以後お見知りおきを」

「い、いいよっ！　じぶんで洗うから！」

「お嬢様の命令ですから」

赤面しながら慌てて否定する風太。それに対し彼女がそれは絶対だと言わんばかりに一言。風太が顔を上げて、彼女の表情を見るが

無表情であり何を考えているか読み取りにくいものであった。

「もし、断るのであれば、私も一緒に風太様と入浴させてもらいますが、とお嬢様の命令です——」

「ううっ、わかったよ……」

「では、こちらへ——」

譲らない縁に風太は観念し肩を落とす。彼女に案内され風太はシヤワーの前にある風呂椅子へと座る。

「それでは——」

風太の後ろでタオルを桶につけ濡らす音が聞こえる。風太は緊張した面持ちで唾を飲み込む。

彼の小さな背中にザラザラとした感触が当たる。それと同時に何だか柔らかい感触が彼を襲う。彼女は言葉を発しない、ただ黙々と洗い続ける。どこことなくその場には緊張した空気が漂っていた。

「あっ！ ま、まえはいいよ！　じぶんでやるから！」

「そうですか？」

前へと手を伸ばそうとする彼女に風太は振り返って慌てて静止をする。彼女は変わらず無表情ながらもなぜか少し残念そうに肩を落としていた。

「それでは、私は脱衣所の方でお待ちしていますね。風太様の着付けも任されていますので」

彼女は風太へと石鹸のついたタオルを渡して立ち上がり頭を下げる。

「うんっ！ わかったよ。ありがとうね、ゆかりさん」

「いえ、お気になさらずに」

「あ、そうでした」

まだ何かあるのだろうか？ と風太は首を傾げ彼女を見上げる。

「先ほど、私が断るようであれば風太様と一緒に入浴すると言いましたが、あれはお嬢様の命令ではなく私の独断です」

「それだけです。それでは私はこれで――」

そう言い残し、彼女は再び頭を下げ浴場から出て行く。残された風太は彼女のいた場所へと目をやったまま、狐につままれた様な表情をしており、呆然とただ固まっていた――。

――それから風太は浴場から出てきた後、縁によってメイド服へと着替えさせられる。この時、風太がそのヒラヒラとしたスカートのメイド服を見て悲鳴を上げたのは言うまでも無い。

着替えが終わった後、縁によって風太はどこかへと案内される。彼女の背中を追い、長い廊下を抜け、階段を上りたどり着いたのは三階のとある一室の前。

「失礼します、お嬢様」

部屋をノックした後、縁が扉を開ける。

「風太様をお連れしました。それと手筈通り着替えの方も済ましてあります」

「うむ、ご苦労だったな。下がってよいぞ」

「はい——」

部屋の中から聞こえる、聞き覚えのある声。部屋の中にいるであろう人物に縁が頭を下げ去っていく。

残された風太は壁に手をやり恐る恐る部屋の中を除き見る。その部屋にはやはり彼女がいた。

「ふふっ、似合っているぞ、風太。入っておいで」

部屋の正面に置かれたロッキングチェアに足を組んで腰をかけ、心底楽しそうな笑みを見せる玲羅。

部屋には絨毯が敷かれ、横に二部屋の広さを誇り、ロッキングチェアから左壁際には等身が移る鏡と本棚。右側面の壁には衣装棚やタンスが並び、中央にはアンティーク風のテーブルと椅子が二つ。奥にはカーテンのついた高級そうなベッドと、同じくアンティーク風の机と椅子が置かれていた。

「ふむ、やはり少しサイズが大きすぎたようだな。今度お主用のサイズでも頼むか。それと他の服もな」

風太は部屋へと入り、彼女の近くにある鏡の前へと立ち自分の姿を見直す。袖が長く腕をまくらないと手が出ず、スカートは膝元よ

り少し長いくらいだ。

あらめて自身の格好を見ると気恥ずかしさがよみがえり、風太は赤面して慌てて鏡から目を背ける。

「そういえば風太よ。まだ聞いてなかったな」

「ん。な〜に？」

「お主の事だよ。今日の化け物といい、何か私が聞いておかなければいけないことがあるんだろう？」

「あっ！ そうだった！」

「まったく忘れておったのか？」

「うう〜だって……」

色々あったことですっかり忘れていた自分の本来の使命を思い出す風太。忘れていたことを彼女に指摘され少し涙ぐみ肩をしゅんと落とす。

「そんなことで泣きそうになるな少年。男の子だろ？」

「う、うんっ！ それじゃ話すね！」

風太は目をこすり、顔を上げ、玲羅の顔を見据える。深呼吸をした後、風太はゆっくりと口を開く。

彼がいた世界のこと。その世界からこっちの世界へと妖魔が溢れ出したこと。あふれ出した妖魔を倒すため自身がこの世界へと来た

ことと、自身の持ち主に玲羅が選ばれたことを。難しいことがよくわからない風太はこれらのことをたどたどしい口調ながら簡潔に説明していく――。

「――ふむ、だいたいはわかった。それで私に今日現れたような化け物とこれからも戦えということか？」

「う、うんっ……きつとかなり危ない目にあうかもしれないから、む、むりならぼくは――」

「いいぞ」

「ほ、ほんとっ?！」

「ああ、ただし――」

特に悩む様子も無くあっさりと答えた玲羅。うつむきかけていた風太は顔を上げ、彼の前にロッキングチェアから降りた彼女が立ち尽くす。

「私の物に――玩具おもちゃになると言うのであればな」

「お、おもちゃ?……」

「まあ、その言葉に特に深い意味はない。私は命を賭けるのだから安い代償だろ?」

「う、うんっ！、わかったよ！」

風太は顔を下げ、少しだけ考えた後、頭を上げ意思のこもった強い瞳で彼女の顔を見つめなおす。

「ふふっ、契約成立じゃな。それと私の事は玲羅様と呼ぶように」

「れ、れいらさま……」

「よしよし、いい子だな風太」

恥ずかしさからか顔が赤くなる風太。そんな風太の前に彼女が腰を下ろし、優しい笑みを見せながら頭を優しく撫でる。

「さて、そろそろ寝るとしようか。風太は私と一緒に私のベッドで寝るといいぞ」

玲羅は立ち上がり、部屋の奥にあるベッドの方へと向かっていく。

「えっ？　ぼ、ぼくはかたなになってかべのほうで寝るからいいよ！」

「何だ？　私と寝るのが嫌なのか？」

「いや、あの……」

「何だまだ小学生ぐらいなのにもかして恥ずかしいのか？　意外と人見知りするタイプなんだな」

「まあ、いい。持ち主の命令だから断ることは許されないぞ。ほれ、さっさと来ないか」

「うん、うん……」

立ち止まっていた玲羅が再びベッドの方へ歩き始めていく。風太も自身の胸に手をやり、鼓動が早まるのを感じながら遠のいていく彼女の背中を恐る恐る追いかける。

電気を消した薄暗い部屋の中、ベッドの上で風太は吐息がかかるほどの距離で玲羅の隣に横たわる。

緊張しつつも、疲れがたまっていたのか風太は彼女の胸の中へと顔をうずめ、寝息を立てすぐ眠りへとつくのであった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0843y/>

僕の持ち主は女王様

2011年11月11日13時19分発行